

日本語における接頭辞「御」の付く語彙について —「ミ」の派生の諸側面—

鄭 貞美

1. はじめに
2. 接頭辞「御」の機能と前近代の「御」
 - 2.1 接頭辞「御」の機能
 - 2.2 前近代における「御」の付け方
3. 接頭辞「ミ」付けの尊敬語
4. 接頭辞「ミ」の派生
5. おわりに

キーワード：御（ミ）、御（オン）、御（ギョ）、
御（ゴ）、御（オ）、敬語、尊敬語、
美化語

1. はじめに

本稿は、日本語における接頭辞「御」（ミ）の付く語彙に関する使い方を分析しつつ、必要に応じて「ミ」と深く関わっている「オン」・「ギョ」・「ゴ」・「オ」も取り上げて、その「ミ」の機能変化について追究することを目的とする。

日本語の接頭辞「御」には、訓読みとして「オン」・「オ」・「ミ」、漢音読みとして「ゴ」、そして呉音読みとしては「ギョ」の5つの読み方がある。これらの読み方は使い方によって、尊敬語や謙讓語、そして美化語の機能に分けることができる。

土井忠生（1969）は接頭辞「御」に関して、次のように述べている。「ギョ」・「ゴ」は字音語、「ミ」・「オン」・「オ」は固有語につく。「ギョ」は「ゴ」より敬意が高く、「ギョ」は主上・法皇に用い、臣下では関白に限られた。「オン」・「オ」は「ゴ」に、「ミ」は「ギョ」に類似して

いるが、室町末期に「オン」は書き言葉か、あるいは説教などの重々しい言い方の話、そして「オ」は日常会話の中に用いたとされる。さらに榊原邦彦（2004）は、主に「ミ」は名詞に付いて尊敬を表す接頭辞であるとしている。

一方、『デジタル大辞泉』（2011）では、「ミ」は「神仏・天皇・貴人など尊敬すべき人に属するものであることを示し、尊敬の意を添える」としている。要するに、尊敬の意を表す接頭辞の「ミ」・「オ」・「オン」・「ゴ」・「ギョ」の中でも、ことに「ミ」は特別なことに関する敬意を表すとして他の接頭辞とは区別されている。しかし、神仏・天皇・貴人に関するどんな事物に付けるのか、その具体性は乏しい。また、「ミ」が神仏・天皇・貴人に関することに付けられるとして、現在でも同様に使われているのか、その使い方や機能に関しても明確ではない。

「ミ」は、どのような語彙につけるのかについて榊原邦彦氏（2004）は、本来、和語や和語化した漢語にも付き、文語に多く用いられる。今日は特定の語に付くが、「オ」よりは「ミ」のほうが品位があり、詩的であるとしている。さらに辻村敏樹（1968）は、前近代にまで遡って、「御」の読み方を調べている⁽¹⁾。しかし、文禄期における書物の中にみる「御」の読み方である「ミ」・「オ」・「オン」・「ゴ」について調べてはいるものの、どんな語彙に対して「ミ」と読

(1) 辻村敏樹（1968）「吉利支丹関係資料に見える敬語接頭辞について」『敬語の史的 연구』の研究成果は、桜

井光明（1971）が「近代の敬語Ⅰ」『敬語史』講座国語史第5巻、大修館書店の194～199頁で紹介している。

んだのか明確な結論は出していない。

そこで本稿では、このような先行研究の成果を踏まえつつ、現代日本語において敬語の意を表すとされる接頭辞の「ミ」を用いる名詞の語彙を中心に考察を行う。果たして、「ミ」は尊敬語にしか付かないものなのか、さらに「ミ」が品位だけを意味するのか、その意味機能に着目して追究を行うことにする。

2. 接頭辞「御」の機能と前近代の「御」

2.1 接頭辞「御」の機能

日本語における接頭辞「御」の「オ」・「ゴ」・「ミ」・「オン」・「ギョ」は3つの機能、つまり尊敬語・謙讓語・美化語の役割を果たしている。

まず、接頭辞「御」が付いて尊敬語の機能を果たしている語彙を幾つか取り上げると、以下の通りである。

- ① ゴ結婚
- ② オ身体
- ③ オン中
- ④ ミ意図
- ⑤ ギョ園

相手を敬う時や品のあるしゃべり方には、①～⑤の接頭辞を用いるが、今日の日常生活における会話の中でよく使われるのは①・②・③の接頭辞である。一方、④・⑤の「ミ」・「ギョ」という接頭辞は、あまり用いられない。これら①～⑤の他にも数多くの「オ」・「ゴ」付けの尊敬語があるのは言うまでもない。

次に、接頭辞「御」が付き、謙讓語の意味合いとして使われる語彙を以下に挙げる。

- ⑥ オ手紙
- ⑦ オ返事
- ⑧ ゴ無礼
- ⑨ ゴ迷惑
- ⑩ ゴ挨拶

これらの謙讓語の接頭辞「オ」・「ゴ」は、その次に続く用言が重要な役割を果たす。つまり、⑥～⑩は「-致します」・「-申し上げます」・「お-します」を付けてこそ謙讓語となる。

そして、以下の単語は接頭辞「御」を付けると、美化語になる。美化語とは、同じ事柄の語彙について「話し手」や「聞き手」が目上・目下に関係なく共に使えるという「双方向性」を持ち、用いないからと言って非難されることはなく「話し手」の意向次第であるという「任意性」を持っていることが、その特徴である⁽²⁾。

- ⑪ オ寿司
- ⑫ オ皿
- ⑬ オ醤油
- ⑭ オ箸
- ⑮ ゴ飯

この⑪～⑮を含む美化語の機能を果たす現代日本語の接頭辞「御」には、主に「オ」・「ゴ」が用いられるが、「ゴ」よりは「オ」が圧倒的に多い。日常生活の中で「オ野菜」・「オ布団」・「オ庭」・「オ買い物」など数多くの語彙が散見される。

このように、「御」(「オ」・「ゴ」・「ミ」・「オン」・「ギョ」)は尊敬語・謙讓語・美化語の機能を果たす接頭辞である。ことに、現代の日本語においては主に「オ」・「ゴ」が、尊敬語・謙讓語・美化語の役割を補っており、残りの「ミ」・「オン」・「ギョ」は専ら尊敬語の機能だけを果たす傾向が強いと言えよう。以下では、「ミ」を中心にさらに詳しく考察を行っていくことにする。

2.2 前近代における「御」の付け方

前近代における『天草本伊曾保物語』(文禄2<1593>年刊)、『天草本平家物語』(文禄3<1594>年刊)、『吉利支丹教義』(文禄元<1592>年刊)にみる「御」は、それぞれどのように読んだのか、辻村敏樹(1968)の研究成果

(2) 鄭貞美(2012)「韓国語に見られる美化語の要素－「말씀malsseum」と「藥酒yagju」を中心に－」『第63

回朝鮮学会発表』朝鮮学会、福岡大学

を簡単に紹介して、問題点を指摘することにする。

この3つの史料の特徴について、辻村は『天草本伊曾保物語』は当時の話しことばをもっともよく反映し、『吉利支丹教義』は純然たる当時の書きことばで、『平家物語』は両者の中間的存在であるとしている。これらの書物における「御」の読み方は、(表1)の通りであり、○印は用例があって、×印は用例のないことを意味する。

この3つの書物の中で、『天草本平家物語』だけに「ミ」の用例があって、他の書物には用例がない。これは辻村の言っている、書物の特徴である書き言葉や話し言葉に関わっていると考えにくい。

辻村は「ミ」の読み方の言葉は、「ミカド」「ミス」など限られた和語・漢語であるとしている。前者の「御門」(ミカド)は天皇の位やその尊称、後者の「御簾」(ミス)は宮殿や神殿に用いるすだれである。『天草本平家物語』における「ミ」付けの用例は、以下の通りである。

<和語>

- (a) 足
- (b) 口
- (c) 国
- (d) 言葉
- (e) 輿
- (f) 名
- (g) 山
- (h) 代

<漢語>

- (i) 棺
- (j) 教書
- (k) 堂
- (l) 弟子

辻村が調べて取り上げている上記の「ミ」付けの語彙の中で(a)御足(ミアシ)、(b)御口(ミクチ)は天皇家の人の足や口であろう。(c)御国(ミクニ)、(d)御言葉(ミコトバ)、(e)御輿(ミコシ)は天皇と関わる語彙で後ほど言及する。そして(f)御名(ミナ)は天皇の名前、(g)御山(ミヤマ)は天皇が登った山、(h)御代(ミヨ)は天皇の在位や治世、(i)御棺(ミヒツギ)は天皇や貴人の遺体を入れる棺、(j)御教書(ミキョウジョ)は主人の意を奉じた日本中世における一つの文書様式、(k)御堂(ミドウ)は仏像を安置した建物や神の宿る建物、(l)御弟子(ミデシ)は天皇や貴人の弟子と説明することができる。

この時期の書物に「呉読み」や「漢読み」が関わっていることはもとより、『天草本平家物語』以外の書物には特定の読みしか確認できないことを見逃してはいけない。

今日の「ミ」に関する一般的な説明である「神仏・天皇・貴人など尊敬すべき人に属するものであることを示し、尊敬の意を添える」(『デジタル大辞泉』(2011))ということに鑑みると、『天草本伊曾保物語』や『吉利支丹教義』に「ミ」が見られないのは不思議である。今日のキリスト教における「ミ」の語彙を検討する必要がある

(表1)『天草本伊曾保物語』・『天草本平家物語』・『吉利支丹教義』における「御」の読み方の用例

接頭辞	『天草本伊曾保物語』 (文禄2<1593>)	『天草本平家物語』 (文禄3<1594>)	『吉利支丹教義』 (文禄元<1592>)
オン	○	○	○
オ	○	○	×
ミ	×	○	×
ゴ	○	○	○

る⁽³⁾。なお、(表1)で見ると書物によって特定の「御」の読み方が現れないのは、和語か、あるいは漢語かの語彙の性質やその語彙の頭音に関わっていることもあり、「御」の読み方が完全に確立していないこともありうると考える。何よりも「御」をつける対象によって、その読み方が変わってくるということは間違いない。つまり、同じ語彙をもって異なる「御」の読み方をしていることが、それを間接的に物語っているとさえ言えよう⁽⁴⁾。

3. 接頭辞「ミ」付けの尊敬語

現代日本語の中で接頭辞「ミ」は、「神仏・天皇・貴人など尊敬すべき人に属するものであることを示し、尊敬の意を添える」、つまり尊敬語になるとされる。その具体的な語彙の実例を取り上げてみることにする。

<天皇家>

- (1) 御幸通り (ミユキドオリ)：兵庫県姫路市の地名
- (2) 御厨 (ミクリヤ)：大阪府大阪市東大阪市の地名
- (3) 御影 (ミカゲ)：兵庫県神戸市東灘区の地名
- (4) 御輿 (ミコシ)：天皇の乗る輿
- (5) 御子 (ミコ)：天皇の子
- (6) 御代 (ミヨ)：天皇の治世やその在位期間
- (7) 御陰 (ミカゲ)：天皇から受けた恩恵

- (8) 御簾 (ミス)：宮殿に用いるすだれ
- (9) 御巖 (ミイツ)：天皇の威光
- (10) 御言葉 (ミコトバ)：天皇の言葉

(1) 御幸通り (ミユキドオリ)における御幸 (ギョコウ) は「ミユキ」とも読む。(2) 御厨 (ミクリヤ) は古代・中世に皇室に神饌の料を献納するため設けられた所領である。しかし、今日の(1)や(2)は、元来の意味ではなく、記しているように地名(固有名詞)となっている。これらの地名は全国に散在している。そして、(3) 御影 (みかげ) も天皇ゆかりの地名である。この「御影」は、神功皇后が姿を映して化粧した「沢ノ井」があることから由来している⁽⁵⁾。

一方、天皇を映した写真や肖像画の意味合いとしては、次の御影 (ギョエイ) もある。また、天皇家ゆかりのことは、すべて「ミ」ではなく、「ゴ」も使う。つまり、今日の御所 (ゴシヨ)・御前 (ゴゼン)・御殿 (ゴテン) が取りあげられよう⁽⁶⁾。そして、(7) 御陰 (ミカゲ) であるが、今は一般的には「オカゲ」と言われており、天皇の前でも同じく「オカゲ」に「様」を付けて「お陰様」を用いると考えられる。

さらに、(10) 御言葉 (ミコトバ) は天皇の言われた言葉である。しかし今日においては、例えば「天皇・皇后両陛下が京都へ 妙心寺をご訪問」⁽⁷⁾、そしてマスコミ各社は毎年の新年に「天皇は御言葉 (オコトバ) を述べられました」と報じている。

(3) ちなみに、「ミ」だけではなく、3つの書物にみる「計らい」という語彙が「オン計らい」・「オ計らい」・「ゴ計らい」、そして「大事」は「オ大事」・「ゴ大事」のように、それぞれ異なる読み方をしていることに対しては、今日の「オ」・「ゴ」が尊敬語や謙譲語、そして美化語の性質があることも踏まえて追究する必要がある。

(4) 文禄期の「おん苦しみ」・「おん車」・「おん住い」・「おん返事」に対して、今日は「お苦しみ」・「お車」・「お住い」・「お返事」・「お縁」は「ご縁」、「み口」・「み国」・

「み弟子」は「お口」・「お国」・「お弟子」、そして「ご一人」・「ご大事」・「ご告げ」・「ご計らい」は「お一人」・「お大事」・「お告げ」・「お計らい」としており、これもその対象によるものと考えられる。

(5) 『角川日本地名大辞典(兵庫県)』(1988) 角川書店

(6) 今日、天皇家に関わるものではなくても、立派な家に対して御殿 (ゴテン) と言われるが、その根底には天皇が住むような豪邸の意味がある。

(7) <http://www.news24.jp/> (2013年6月22日)

このように、今日では天皇家であっても接頭辞の「ミ」を付けるのではなく、一般的に「オ」・「ゴ」を付けている⁽⁸⁾。さらに、天皇家に関して「ミ」を付けるのは固有名詞化しているか、あるいはあまり用いなくなつて死語化する傾向にあると言える。

<公家・貴人>

- (11) 御堂関白記 (ミドウカンパクキ) : 平安時代に藤原道長が書いた日記
- (12) 御室 (ミムロ) : 貴人のお住まい
- (13) 御台盤所 (ミダイバンドコロ) : 貴人の妻を敬つていうこと
- (14) 御先 (ミサキ) : 貴人の先払い
- (15) 御影 (ミカゲ) : 神の靈魂

この(11) 御堂関白記 (ミドウカンパクキ) は、平安時代の摂政太政大臣である藤原道長が書いた日記である。ここで、「ミ」という接頭辞が確認できる。(12) 御室 (ミムロ) は、「オムロ」とも読み、今日の敬語のほとんどが接頭辞に「オ」・「ゴ」を付けるという傾向を反映していると考えられる。さらに、公家に関わる(11)の「ミ」も天皇家の(1)～(3)とほぼ同じように固有名詞化している。そして(12)御室(ミムロ)を「オ」に変えたり、さらに多くの語彙は、あまり用いない傾向、つまり天皇家に付ける「ミ」と同じく死語化している傾向にある。

<仏神>

- (21) 御輿 (ミコシ) : 神靈の乗り物・神輿
- (22) 御子 (ミコ) : 神の子・神子
- (23) 御簾 (ミス) : 神殿に用いるすだれ
- (24) 御手洗 (ミタラシ) : 神仏を拝む前参拝者が手や口を洗い清める所
- (25) 御仏 (ミホトケ) : 仏を敬つていう語
- (26) 御巖 (ミイツ) : 神の威光

- (27) 御衣木 (ミソギ) : 神仏の像を作るのに用いる材木
- (28) 御前 (ミマエ) : 神仏の前
- (29) 御酒 (ミキ) : 神に供える酒
- (30) 御堂 (ミドウ) : 仏像を安置した堂

すでに、取り上げてきた天皇家の(4) 御輿 (ミコシ) : 天皇の乗る輿、(5) 御子 (ミコ) : 天皇の子と、仏神における(21) 御輿 (ミコシ) : 神靈の乗り物・神輿、(22) 御子 (ミコ) : 神の子・神子における「ミ」は、相通じるところがある。つまり、戦前まで天皇は現神として見なされていたことを鑑みると、天皇や神仏に関する同じ語彙に「ミ」を付けるのは不思議ではない。さらに、天孫降臨神話の観点に立って考えると、(5) 御子 (ミコ) は神の子とも言える。

他にも、御坂 (ミサカ)、御稲 (ミシネ) という語彙があるが、坂と稲に関する尊敬とは考えにくい。これらは、恐らく天皇や神に関わる坂と稲であろう。つまり、新嘗祭のため天皇が直接種籾を植える儀式に使われる稲が「ミシネ」であると考えられる。

<キリスト教>

- (31) 御旨 (ミムネ) : (『典礼聖歌』(1980) あかし書房 : 54番)
- (32) 御業 (ミワザ) : (『典礼聖歌』(1980) あかし書房 : 393番)
- (33) 御国 (ミクニ) : (「ミサ後の祈り」、日本カトリック教会)
- (34) 御心 (ミココロ) : (「主の祈り」日本カトリック教会)
- (35) 御言葉 (ミコトバ) : イエスの言葉
- (36) 御名 (ミナ) : (「主の祈り」日本カトリック教会)
- (37) 御聖 (ミセイ) : (『典礼聖歌』(1980) あかし書房 : 202番)

(8) このことは、敗戦後の1946年、昭和天皇が「人間宣言」

をしたことが深く関わっていると考えられる。

- (38) 御意図 (ミイト) : (『典礼聖歌』 (1980)
あかし書房 : 202番)
- (39) 御王 (ミオウ) : (『典礼聖歌』 (1980)
あかし書房 : 202番)
- (40) 御許 (ミモト) : イエスのもと

上記のキリスト教 (カトリック) に関する語彙 (31) ~ (40) の主体はいずれもイエスである。したがって、「ミ」はイエスを敬って付けているのである。(33) 御国 (ミクニ) はイエスの理想が実現できている国であるが、キリスト教以外では様々な意味がある。つまり、「御国譲り」は天皇が皇太子に譲位すること、「御国言葉」は日本語の意味で、前者は皇位で後者は日本の意味になる。一方、今日の一般社会では「御国」(オクニ) というが、故郷を意味する。例えば、「お国はどこですか」という問いを耳にしたりする。

そして (35) 御言葉 (ミコトバ) や (40) 御許 (ミモト) は信者の祈りや言葉の中でよく用いる語彙である。御名が天皇の名前である場合は「ギョメイ」とする。一方、(36) のようにイエスの名前の意味としては「ミナ」という。ちなみに、カトリック教会の祈りの中では、三位一体の意味合いで「父と子と聖霊の御名 (ミナ) によってアーメン」という下りがある。

仏であれ、イエスであれ、その教えは御教え (ミオシエ) であり、その姿は御姿 (ミスガタ)、そして発した言葉も御言葉 (ミコトバ) という。つまり、(35) 御言葉はイエスの言葉、(10) 御言葉は天皇の言葉である。さらに、仏・神様の安置されている堂は、(30) 御堂 (ミドウ) といわれる。とりわけ、カトリック教会では聖堂「せいどう」、または「ミドウ」とするが、この場合「聖」が「ミ」という読みになる。

このような神仏関係やキリスト教 (カトリック) においては、今も宗教儀式の中で「ミ」を付けた語彙、つまり (21) ~ (40) までの語

彙をよく用いている。但し、キリスト教会においてイエスに関する事柄はほとんど「ミ」を付けているがマリアに関しては「ゴ」を付けている。例えば、マリアに対して保護を求める祈り⁽⁹⁾には、「おとめマリアよ、あなたのご保護のもとにかけより… (後略)」という下りがある。これは、イエスとマリアの事柄について「ミ」と「ゴ」で区別しているのである。このことは、同じ敬語の接頭辞であっても「ゴ」よりは「ミ」のほうが敬う程度の高いものであることを証明しているのではないだろうか。

<祖霊>

- (41) 御霊・御魂 (ミタマ) : 祖霊を尊んでいう語
- (42) 御哭 (ミネ) : 葬儀のとき、弔意を表して声を上げて泣くこと
- (43) 御影 (ミカゲ) : 死んだ人の姿、または絵や肖像・みえい
- (44) 御社 (ミヤシロ) : 死者の霊を祭る建物

この「御」(ミ) は、(41) ~ (44) のように天皇・公家／貴人・仏神・キリスト教以外、祖霊にも用いられる。

ところで、「御」(ミ) の代わりに「美」(ミ)・「深」(ミ) とともに書いて、主として和語の名詞や地名に付けて褒め称えたり、語調を整えたりするのに用いる。例えば、「美山」・「深山」が取りあげられよう。そこで、「御空」は天皇、貴人、または神と関わる空、「美空」は空の美称であると考えられる。

また御里 (ミサト) は、一般的に里の美称としての「美里」とも考えられるが、尊敬の里なら天皇の住まう京都である。したがって、接頭辞の「ミ」の付く語彙は、天皇・公家／貴人・神仏・キリスト教・祖霊に関わる尊敬語なのである。

(9) 『祈りの手帳』 (2008 : 23) トン・ボスコ社

榊原邦彦(2004:289)は、「翁」は語頭の音が「オ」なので接頭辞として「オ」は付かず、「ミ」が付くとしている。これは神仏・天皇・貴人という対象ではなく、頭音によって接頭辞が変わってくる例である⁽¹⁰⁾。例えば一般的に、神社の敬称として御宮(オミヤ)と言うが、この際の「御」(オ)を「御」(ミ)とすれば「ミ」が二つ重なり、「ミミヤ」になって音韻がよくないため、「オミヤ」になったと考えられる。

<キリスト教>

- (二一) 御母(オンハハ):マリア(「天使祝詞」、日本カトリック教会)
- (二二) 御父(オンチチ):イエス(「主の祈り」、日本カトリック教会)
- (二三) 御一人子(オンヒトリゴ):イエス(『典礼聖歌』(1980)あかし書房:208番)
- (二四) 御身(オンミ):イエス(「天使祝詞」、日本カトリック教会)
- (二五) 御子(オンコ):イエス(「アヴェ・マリアの祈り」2011年6月14日、日本カトリック司教協議会認可)

このキリスト教(カトリック)関係における(二二)～(二五)は、イエスを意味する言葉である。(31)～(40)で見てきたように、キリスト教ではイエスを敬う意味で「ミ」を付けるが、このように「オン」を付ける場合もある。それは御身(オンミ)における「オ」を「ミ」とすれば「ミミ」になるため、音韻的なことが働き、「オン」になったと考えられる。なお、イエスは神の子であるが、御子(ミコ)ではなく、御子(オンコ)と名付けているのは、天皇家(5)

や仏神(22)における御子(ミコ)と区別するため、「オン」を付けたものと考えられる。つまり1549年、ザビエルが日本にキリスト教(カトリック)を布教する以前、すでに日本には「ミコ」という語彙が存在していたので、その語彙を意識した付け方であろう。しかし、稀にカトリック教会において御子(ミコ)という場合もある⁽¹¹⁾。

4. 接頭辞「ミ」の派生

日本語の接頭辞「ミ」が尊敬語として機能する接頭辞であることは確かであるが、これ以外の意味合いはないのだろうか。この「ミ」の本来の機能からの変化について、本節では考察する。

以下の3つの語彙から、接頭辞「御」の付け方やその変化について分析をすることができよう。

- (A) 籤(くじ)
- (B) 御籤(みくじ)
- (C) 御神籤(おみくじ)

(A)は事の成否や吉凶、そして当選や順番を判断する方法である。(B)は神社や寺で参拝者の吉凶を占うもの、また(C)も(B)とほぼ同じ意味である。ここで、(B)は「籤」の敬語であり、(B)から(C)への移行では「御」(ミ)を「神」(ミ)に置き換えて読んでいる。

(B)の「ミ」だけでも神仏の意味合いがあるにも関わらず、なぜさらに「オ」を付けているのであろうか。結論から言うと、これは尊敬

(10) 天皇・公家/貴人・神仏・キリスト教・祖霊に付ける尊敬の接頭辞は「ミ」以外に「オン」「ギョ」がある。榊原邦彦氏(2004:291)は、「オン」の使用について「高い敬意が望ましい場合に使う」とするが、接頭辞「オン」よりは「ミ」が敬う程度が高いことがわかる。天皇・公家/貴人・神仏・キリスト教・祖霊に使われる接頭辞「オン」は、今日の一般社会にも広

がっている。例えば、「御身お大切に」、「御礼申し上げます」が取り上げられる。一方、現代日本語では、接頭辞「ギョ」はほとんど使われていないが、御慶(ギョケイ)は年賀状によく書く語彙である。なお、御意(ギョイ)は「天皇の考えやその意向」だけではなく、「目上の人のかんがえや意向」を敬うときにも用いられる。

(11) 『典礼聖歌』(1980:202)あかし書房

語の御籤（ミクジ）が美化語化しているからであろう。つまり、美化語なら御籤（オクジ）でも十分であるが、こうなると神の意味合いが薄れてしまうため、「御」（ミ）の代わりに「神」（シ）を付け、さらにその前に「御」（オ）を付けたと考える。最近、寺や神社ではほとんど御神籤（オミクジ）と言われており、美化語として完全に定着している。

要するに、尊敬語の接頭辞「ミ」、その前にさらに「オ」を付けることによって「ミ」の尊敬の機能は「神」に変わり、本来の尊敬の「ミ」は美化語の「オ」に変化して、美化語化している。

そして、以下の（A'）（B'）（C'）も同じ理屈で説明できよう。すでに（29）御酒（ミキ）で取りあげた語彙である。

- （A'）酒（き）
- （B'）御酒（みき）
- （C'）御神酒（おみき）

この（A'）酒（き）は、「酒」の古い名称である。「酒」に「ミ」を付けた（B'）御酒（ミキ）は「神に供える酒」の意味合いになる。しかし、神に捧げる酒なら（B'）御酒（ミキ）だけで十分なのに、さらに「御」を加えてすでにあった「御酒」の「御」は「神」（シ）に変えているのが（C'）御神酒（オミキ）である。この（C'）御神酒（オミキ）は敬語の（B'）御酒（ミキ）を美化語化したものに他ならない。

すなわち、今日の一般社会では、美化語として「御酒」（オサケ）としているが、これは神様に供える酒とは異なる。古語である酒の「キ」は、今の一般社会の飲み会では使わないが、一般の社会とは関わりのない酒の意味として存在しつつ、神様と関わる酒の意味で「ミ」を付けて「ミキ」、さらにその前に「オ」を加えて「オミキ」となり、神様に関わる酒として美化語化

している。

さらに、次のような語彙を分析しよう。

- （あ）輿（こし）
- （い）御輿（みこし）
- （う）御神輿（おみこし）

（あ）は人が乗る輿であるが、（い）「御」（ミ）を付けることによって、（4）や（21）で見えてきたように、天皇あるいは神が乗る輿になる。さらに、（う）のように「御」（ミ）を「神」（シ）に替えると、天皇ではなく神しか乗ることのできない輿になる。つまり、神の乗る輿を美化した語彙と考えられるのである⁽¹²⁾。

この他にも、古来、長野県の諏訪湖では、湖面の氷結面の一部が膨張して盛り上がって氷が持ち上げられる現象をみてその年の豊凶を占う御神渡り（オミワタリ）という儀式が行われる。

- （I）渡り（わたり）
- （II）御渡り（みわたり）
- （III）御神渡り（おみわたり）

このように、「御」（ミ）が「神」（シ）が変わって、その前に「御」（オ）を付ける過程を美化語化したとした。これらは神と関わるものなので、「御」が「神」に変わっていると考えられる。

さらに、同じ理屈でキリスト教（カトリック教会）における御聖堂（オミドウ）という語も分析できる。

- （ア）堂（どう）
- （イ）聖堂（みどう）
- （ウ）御聖堂（おみどう）

一般的には堂（ドウ）に「御」（ミ）を付けて御堂（ミドウ）とし、（30）御堂（ミドウ）

(12) 井上史雄（2012：41-44）でも美化語としている。

のように神のいる場所の堂という意味で尊敬語である。一方、神の存在しない堂は御堂(オドウ)とするが、これは美化語である。カトリック教会では「御堂」ではなく、自らの宗教に特化した神のいる聖なる堂の意味で「聖堂」と書いて「ミドウ」と読む。つまり、「御」(ミ)を「聖」(ミ)に変えているのである。さらに、聖堂(ミドウ)に「御」(オ)を付けて御聖堂(オミドウ)と言っているが、ここで「聖」(ミ)はカトリック教会での「聖なる」という意味の尊敬語であり、その前に「御」(オ)を付けることによって美化語化している。

言い換えれば、尊敬語の接頭辞「ミ」、その前にさらに「オ」を付けることによって「ミ」の尊敬の機能は「神」に変わるが、カトリック教会では「聖」に変わり、本来の尊敬の「ミ」は美化語の「オ」に変化させて美化語化している。

榊原邦彦(2004:290)は、「オミ大きい」や「オミ帯」は語頭が「オ」なので「オミ」を付けるとする。ここで、接頭辞の「オ」を付けると、「オ」が二つ重なるため「ミ」を付けて、さらにその前に「オ」を加えるということは示唆することが多い。その一つ目は、接頭辞を付けるとき、音韻の要素が絡んでいるということである。二つ目は接頭辞「ミ」だけではなく、さらに「オ」を加えることで、「ミ」を付ける意味や「オ」を付ける意味合いが異なってくるという点である。つまり考察してきたように、「ミ」だけを付けると、天皇・神・貴人に関わることを表す接頭辞の尊敬語になる。そこで、「ミ」だけ付けるのを避けて、さらに「オ」を加えることで、その意味合いが尊敬語から美化語に変わるのである。

5. おわりに

以上のように、日本語の接頭辞「御」、つまり「オ」・「ゴ」・「オン」・「ギョ」・「ミ」の付く語彙は様々な意味機能を果たしているが、その

中でも尊敬の意を表す「ミ」を中心に付け方の特徴や、派生について考察を行った。

一般的に「ミ」は神仏・天皇・貴人など尊敬すべき人に属するものに付けるという説明であるが、前近代の『吉利支丹教義』(文禄期)には「ミ」の用例が見られない。しかし、今日のキリスト教(カトリック)には接頭辞の「ミ」が使われており、すでに『吉利支丹教義』で使われていたことと同様、「オン」も用いている。

天皇・公家／貴人・神仏・キリスト教・祖霊に関わって付けられる「ミ」の中で、天皇家や公家・貴族に関わる語彙の一部は固有名詞化したり、またあまり用いず死語化したりしている傾向にある。反面、神仏やキリスト教などの宗教の場では、今も変わらず用いられている。キリスト教では、ミサや祈りの中では「ミ」と併用して尊敬の意味の「オン」も使われている。天皇家や公家でも「オン」を用いて、一般社会においても使われているが、文語体に使う傾向が強い。

今日、天皇家に付ける敬語の接頭辞「御」は、主に「ゴ」や「オ」としている。例えば、マスコミでは「天皇が新年のお言葉を述べられました」や「天皇陛下のイギリスご訪問に当たって…」としている。この「ゴ」や「オ」は社会全般、つまり一般人の使う語彙にまで広がっている。例えば、「オ宅」、「ゴ心配」等々が取り上げられる。ちなみに、尊敬を表す接頭辞の「ミ」は「ゴ」よりその敬意の程度が高く、さらに「オン」よりも敬う意味合いが強い。

また、接頭辞の「ミ」は敬う意味合いだけではなく、機能の変化も見せている。例えば、御籤(ミクジ)は吉凶の判断に神が関わるため、「御籤」における「御」を「神」に変え、さらにその前に「御」を付けて御神籤(オミクジ)となった。この「御神籤」は「御籤」とほぼ同じ意味合いであり、前者における「御」は敬語よりは美化語の要素が強い。つまり、尊敬語の接頭辞

「ミ」の前にさらに「オ」を付けることによって「ミ」の尊敬の機能は「神」に変わり、本来の尊敬の「ミ」は美化語の「オ」に変化して、美化語化している。神などを敬う意味合いとして「ミ」を付ける尊敬語語彙の一部は、神を美しく表す美化語への派生が確認できる。

最後に、接頭辞の「ミ」を付ける場合、接頭辞に続く音韻との関わりやその語彙が用いられる対象によって「ミ」だけでなく、「オ」・「オン」・「ゴ」・「ギョ」も付けられると考えられるが、このことに関する追究は今後の課題にしたい。

<参考文献>

- 井上史雄 (2012)「美化語「お」の循環過程と幼児語の「お」」
『外国語学部論集』第24集、明海大学
- 榊原邦彦 (2004)『国語表現辞典』和泉書院
- 桜井光明 (1971)「近代の敬語Ⅰ」『敬語史』講座国語史
第5巻、大修館書店
- 鄭貞美 (2012)「韓国語に見られる美化語の要素－「말
갈malsseum」と「藥酒yagju」を中心に－」『第63回
朝鮮学会発表』朝鮮学会、福岡大学
- 辻村敏樹 (1968)「吉利支丹関係資料に見える敬語接頭
辞について」『敬語の史的研究』東京堂
- 土井忠生 (1969)『日本語の歴史』至文堂
- 『祈りの手帳』(2008)ドン・ボスコ社
- 『角川日本地名大辞典(兵庫県)』(1988)角川書店
- 『デジタル大辞泉』(2011)小学館
- 『典礼聖歌』(1980)あかし書房